文化財調査・普及員通信　第 37 号

さねさし

～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

発　行
平成２９年 12 月９日
相模原市文化財調査・普及員
広報グループ

文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク

両手のひらと日本建築伝統の組物をイメージしたもの

目　次

・平穏な来世を願う、中和田延文四年の板碑（双碑）　……　Ｐ１
・埋もれた文化財を訪ねて－津久井の三ヶ木文化財探訪－前篇……　Ｐ２
・古道・地名班の活動
　－甲州道中を打ち上げる－　…　Ｐ３
・ギオンスタジアムでの文化財紹介
　・体験ブース……　Ｐ３
・田名の段丘と文化財の魅力　…　Ｐ４

平穏な来世を願う、中和田延文四年の板碑（双碑）

板碑とは、五輪塔や宝篋印塔（ほうきょういんとう）と同じように石塔のひとつで、中世に使われていた石製の供養塔のことをいいます。板碑は、関東地方に多く分布しますが、供養の内容から追善供養（順修供養）、逆修供養（ぎゃくしゅくよう）とに区別することができます。逆修供養とは、生前にあらかじめ自己の死後の冥福を祈って仏事を営むことをいいます。死後の追善供養で死者に達する功徳は七分の一つである一方、逆修供養は七分の徳すべてを得ることができると説かれたことをうけて、武士及び有力者の間で盛んに行われました。

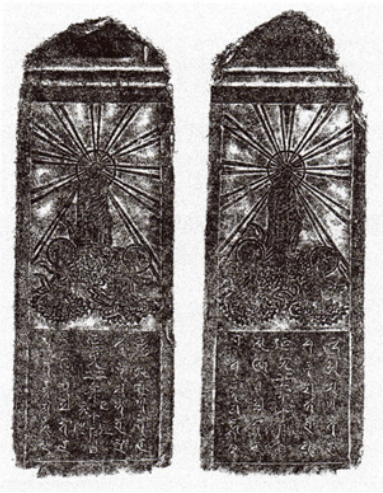

写真１　中和田延文四年の板碑

右図は「中和田延文四年の板碑（双碑）」の拓本で、板碑が元々あった場所は定かではありませんが、往時鎌倉古道がすぐ近くを通っており当時はその路傍に建っていたものと思われます。板碑は、緑泥片岩を素材とし、山形の頭部があり、その下に二条線が刻まれています。正面に彫られた主尊は、仏の種子（しゅじ＝梵字で表した主尊）ではなく、蓮座（れんざ）に乗った阿弥陀如来で、その頭部の周辺に光輪を載せ、それに 22 本の線光背が浮き彫りされています。主尊は、上品下生（じょうぼんげしょう）の来迎印を結び、左脇侍（きょうじ）観音菩薩は蓮台（れんだい）を捧げ、右脇侍勢至（せいし）菩薩は合掌して各々やや横向きで飛雲に乗っています。下部中央には、「延文二二年十月己亥逆修」と刻まれています。

板碑が建てられた延文四年（1359）は、室町幕府三代将軍足利義満によって南北朝合一がなされる明徳三年（1392）まで続く、南北朝内乱の時代でした。本碑は、天皇家までもが分裂してのほぼ６０年間続く全国にわたる内乱という時代にあって、この地の武将夫妻が、自らの平穏な来世を願い、生前供養の証として建てられたものといわれております。

小田急江ノ島線東林間駅から国道 16 号線の中和田交差点を経て、町田方面へ歩いて約 20 分のところにある「惣吉稲荷神社」境内に、「中和田延文四年の板碑（双碑）」は、大切に保存されています。また、当神社境内の西側には徳川譜代の家臣で「地頭大岡吉十郎義成夫婦の墓碑」があります。年の初めに、ご夫婦で訪れて、平穏な世を願ってお参りされてはいかがでしょうか。

（東南班　吉川）

埋もれた文化財を訪ねて―津久井の三ヶ木（みかげ）文化財探訪―　前篇

世の中には、良く知られた文化財もあるが、人知れずと言わないまでも価値ある文化財が人々に認識されず見えないという物もあります。得てして、そのようなものほど、人々の目を覚まさせ、人に役立つことがあります。過去の鑑に現代を映して問題解決に役立つヒントになることもあります。

津久井班は、そんなことを意識しながら三ヶ木地区の文化財探訪を企画することにしました。正直、津久井班には、三ヶ木地区メンバーもいないため手探り状態で企画に取り掛かりました。たまたま郷土史家の布施先生を紹介いただき尋ねて三ヶ木の文化財の概略を伺い、地区を歩き回り古老の方々に話を聞きました。その中で、素晴らしい有形無形の文化財が埋もれていることに気付くことになりました。

そうして、三ヶ木の皆さんのご協力を得て企画を練り上げることが出来ました。

6 月 27 日梅雨の最中の難しい気候でしたが、当日は、曇天で次のようなコースを歩むことになりました。①津久井生涯学習センターで三ヶ木の歴史と文化財を学ぶ。②県立津久井高校で弥生時代の三ヶ木式土器の見学。③土平治一揆記念碑と三ヶ木神社。途中、寺山のろし台を観ながら、④長成寺の焼魂碑。⑤落合の里と坂道。⑥三ヶ木の昔々と三太物語講話。⑦三太旅館と三太物語文学碑。⑧青山取水口沈殿池。総勢 13 名で、津久井生涯学習センターから出発、午後の最終まで雨に降られることなく行程を終了することが出来ました。行程中の文化財については、ポイントを絞り解説します。

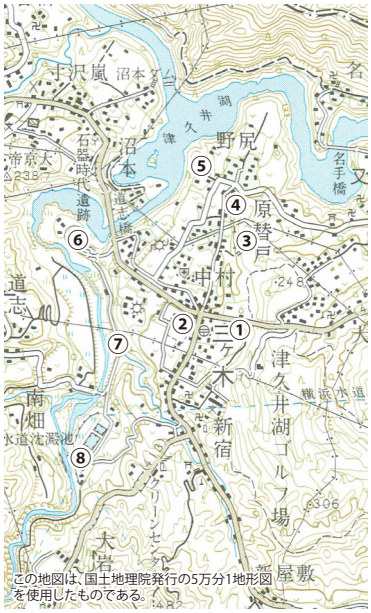

図１　探訪場所

写真２　一揆集合の地と三ヶ木神社参道

①三ヶ木は、江戸時代には、旗本鷲巣（わしのす）家が支配、三ヶ木村のち中野町、津久井町となる。

②弥生時代の三ヶ木式土器　関東では早い時期の中期前葉の個性的な土器がまとまって出土、三ヶ木式土器と名づけられる。立地は、縄文的な台地上にある。この頃の弥生人は、山際の湧き水のある湿地を見つけ、試行錯誤しながら米作りに挑戦していたらしい。立地、再葬墓、弥生時代変遷など興味の尽きない遺跡である。

③土平治一揆記念碑（「天明の飢饉・一揆集合の地」）一揆勢がここに集合した。窪地になっており見つからず密かに集まるのは都合が良い立地である。大凶作の天明 7 年（1787）12 月津久井 28 ヵ村は土平治を首班に、凶作にかかわらず酒作り続ける酒造家に義憤を感じ立ち上がる。江戸時代は、悪代官と苦しめられる善良な百姓というワンパターンが想像されるが、実際、村は村方三役の百姓が、村請して治め、したたかに共同で助け合っていました。一揆の裁きも過酷な厳罰が通念であるが、全体としては軽い裁きであった。その時の裁判は、名奉行根岸肥前守（勘定奉行）が担当し、なんと彼は、旧相模湖町の出自の百姓であったという（この地に墓もある）。この時、彼は名君松平定信の配下として寛政の改革に乗り出すところであり、こんなことが、津久井古城記碑揮毫依頼にもつながるのではないかとも思われる。（次号後編へ）

（津久井班　髙木）

古道・地名班の活動ー甲州道中を打ち上げるー

平成 27 年（2015）3 月に日本橋を出発した甲州道中（街道）の旅も、平成 29 年（2017）10 月の小原宿の本陣（相模原市緑区）の到着をもって、2 年半に及ぶ旅を終わることにしました。道中の最後は、いちばんの難所、小仏峠越えです。東海道の箱根、中山道の碓氷とともに「関東の三関」と呼ばれた小仏の関所が置かれた地です。僧行基が峠に一宇を建て、一寸八分の小仏を安置したことが地名の由来と言われ､峠が武蔵国と相模国の境界になります。

麓の宝珠寺から峠の登りが始まります。寺には、三度飛脚講中が奉納した常夜燈があります。山間僻地を通行することが多い甲州道中は、比較的旅人は少なかったといいます。参勤交代した大名は、高島藩（諏訪）、高遠藩、飯田藩の信州の三藩でした。公用通行では、宇治のお茶を幕府に献上する「茶壺道中」や、幕府直轄領となった甲府勤番の通行、江戸との連絡役の八王子市千人同心の通行などがみられたといいます。

幕末になると、この峠もにわかに騒がしくなります。京都を追われた新撰組の近藤勇が、甲陽鎮撫隊を率いて官軍と戦い江戸へ戻ったといいます。歴史の足跡を踏みしめながら、私たちも峠を越えました。

写真３　小仏峠

写真４　小原宿本陣

次回からは「五日市街道」、江戸への道をたどります。江戸の町づくりに使用された石材と優れた石工や、燃料の木炭の供給地だった五日市がスタートです。

（古道・地名班　宮下）

ギオンスタジアムでの文化財紹介・体験ブース

平成 29 年(2017)10 月 14 日､｢SC 相模原｣と｢相模原の文化財紹介・体験ブース｣のコラボが麻溝台の「相模原ギオンスタジアム」で行われました。

サッカーを観に来る子供たちが、果たして相模原の歴史や文化財に関心を示してくれるのか内心不安でした。しかも、当日は生憎の冷たい雨。

立派に整備されたスタジアムに近づくと、食べ物などを販売する車がズラリと並んでいるのにまず驚きました。その中ほどの一番目立つ場所に、文化財を紹介・体験するブースが設けられていたことにさらにビックリです。

試合開始時間が近づくにつれて、親子連れなどが目立つようになりました。そのうち、文化財のブースに立ち寄る子供たちも増え、縄文土器を珍しそうに触ったり、黒曜石で紙を切って、その切れ味に歓声を上げていました。縄文服を着せてもらいニコニコしながら家族でカメラに収まったり、熱心に質問をされる人まで現れ、文化財に興味をもっていただく新たな層を開拓する機会になった気がしました。

写真５　文化財紹介・体験ブース

今後、「三菱重工ダイナボアーズ」など市が応援しているチームの試合会場や、「市民桜まつり」の会場など、大勢の人たちが集まる場所でこのような催しを地道に実施することにより、市内の歴史や文化財が市民にとってより身近なものになるのではないかと感じました。

（田名向原遺跡案内・普及実行委員会　永山）

田名の段丘と文化財の魅力

相模原市の一部は、相模原段丘、田名原段丘、陽原段丘と３段の段丘で成り立っています。田名地区では、さらに沖積低地の水郷田名を擁しており、昔から上田名、下田名と呼び合う地形となっています。山王坂、滝坂、しろ坂、火の坂が上田名と下田名を結び、夫々の坂は今なお有効に活用されています。

県道 54 号と県道 63 号の合流点周辺で緩い傾斜になり田名原段丘から陽原段丘へ移行します①。県道を少し下った田名坂上遺跡から「奈良三彩小壺」が発掘されました。8 世紀当時の中央政権との関係が偲ばれます。

崖線を東方に進むと田名民家資料館②があります。かつては田名村の役場があり、さらに遡ると明覚寺があり寺子屋･田名小学校の前進がありました。すぐ前には大杉の池があり、八瀬川の源流になっています。田名民家資料館は、かつて使われた農機具や養蚕用具などが展示され、時節に合わせてひな人形展示などが行われ、三栗山財産管理委員会が運営しています。周辺には田名子どもセンターや蚕影山神社があります。

さらにこの先に、相模原市で唯一特定できる「烏山藩制札場旧趾」の史跡があります③。

この先崖上は一気に展望が開け④、眼下に水郷田名、相模川・高田橋が臨め、遠方に仏果山、経ガ岳、大山が一望できます。正面には圏央道が貫く元の入会地である三栗山があります。

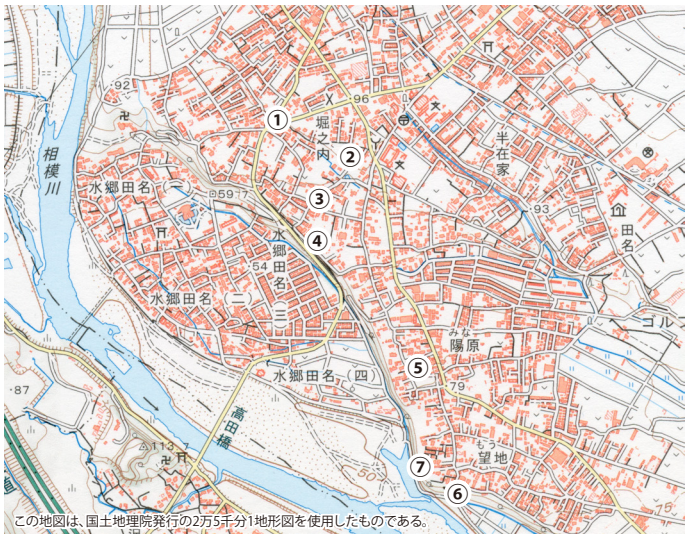

図２　田名の文化財紹介マップ

写真６　望地弁才天坐像

さらに陽原段丘を東に進み、たぬき伝説がある火の坂上を通ると陽原山南光寺に出ます⑤。建武２年 (1335）創建の臨済宗寺院です。部外者の火の不始末で３回火災に遭い、寺宝はことごとく焼失してしまいました。寺子屋の時期もありました。

道なりに進み陽原段丘の急傾斜を一気に下ると、望地弁財天があります⑥。ご神体は高さ 45cm の弁財天坐像で、台座に「江島本宮岩屋弁才天」とあります。明治元年 (1868）の廃仏毀釈に遭い、藤沢の常光寺が隠匿し、明治 11 年（1878)、南光寺森恵力和尚が勧請し、相模川中洲の望陽島に望島殿を構え、養蚕の振興、田名地域の繁栄を祈願しました。その後、明治 29 年（1896）の大洪水で望島殿は流失しましたが、弁財天坐像は無事救出され、南光寺に安置されました。その後、昭和 29 年に現在地に社殿を造り安置しました。現在、ご開帳は元旦と 4 月第 1 日曜日に行われています。

すぐ隣には幕末 (1858）に造られた隧道跡の「万平穴」があります⑦。新田開拓のため、中島万平が中心となり造ったものですが、頻繁に起こる洪水で破壊されてしまったという記録があります。

この先ゆるい傾斜を進行すると、水郷田名の街に出ます。

（西部班　鴫原）

発行連絡先　相模原市教育委員会　文化財保護課　電話 042-769-8371